

福井県越前市の外国人集住地域における保育

——保育者の意識変容からインクルーシブ保育を考える——

林 恵¹⁾・五十嵐 元子¹⁾・若林 秀樹²⁾

1) 帝京短期大学 こども教育学科 2) 宇都宮大学 国際学部

【抄録】

【問題・目的】現在の日本は多文化化が進み、保育園には多くの外国にルーツのある子どもたちが在籍するようになった。越前市の工業地帯での外国人の割合は15%を超えている。筆者らは2019年に越前市を訪問し、保育園の園長らから話を聞いた。その際に「外国人の児童が増え、今までの保育がうまく運ばなくなり試行錯誤をした。その中で一度今までの保育の概念を取り払った」との話を聞いた。この話をさらに深めることにより、外国にルーツのある子どもたちを迎えたことによる保育者の意識の変容を知ることで、インクルーシブな保育の場を作る一助になると考えた。

【方法】Zoomを使用して、約60分間のグループ・インタビューを行った。質問内容は研究協力者に事前に周知し、外国にルーツのある子ども達が入園して感じた困難や、保育を変えていこうと思ったきっかけ、具体的な方法などについて回答を得た。

【結果】インタビューから以下のような聞き取りがなされた。今までの保育の方法では、通用しない場面があり、とにかく遊ぶことから始めた。しかし、このままでよいのだろうかとの葛藤がある中、それぞれがもつ文化背景の違いに気づき、かかわりや声かけのなかに、自身が培ってきた価値観に文化的な背景が含みこまれていたことに気づいた。その気づきから価値観や文化の違いと向き合うことで、どちらか一方に合わせることを考えるのではなく、保育の場面の意味そのものを問い直すことにつながっていった。

【考察】インクルーシブな保育の場を支えると思われる状況が、以下のように描き出された。①従来の保育がうまく運ばなくなった時に、自分たちがもっている当たり前を他者や自己との対話によって差異の認識を深め、価値観を再考していく。②価値や意見の違いを折り合うのではなく、問題となる物事の役割の本質を問い直す。③どのような意見も安心して話せ、聞ける状況が日常的に存在し、保育者が同僚とともに自分たちの保育を問い直し、変わり続けていく。

【キーワード】多文化、インクルーシブ保育、保育者の意識の変容

I. 問題意識と目的

1. 外国にルーツのある子どもの背景

コロナ禍以前の日本はかつて経験したことのないペースで急速に多文化化が進んでいた。政府は平成30年6月、「経済財政運営と改革の基本方針」の原案で外国人の新たな在留資格を設けることを明記し、受け入れる外国人労働者の対象を単純労働者の領域にも拡大することとした。さらに専門性を有すると認められれば在留期限を撤廃、家族の帯同も認める方向を示した。50万人超の外国人労働者の受け入れ増を見込

み、人材不足を解消し、生産性を向上されていこうとする考えである。法務省の在留外国人統計によれば2020年12月現在2928940人であり、コロナウイルス感染拡大前の2019年12月では3651154人であった。これは入国管理法が改正された1989年の約98万人の約3.7倍となっている。現時点では日本の外国人人口比率は、他の先進諸国と比較しかなり低い割合であるが、その急速な変化に社会的対応が追いついていない現状がある。そして、今後これらの方針に従えば、多文化化はさらに加速し、様々な問題が生じることが予想される。

是川（2012）は日本における外国籍保有者の定住化が階層的差異を伴って進んでおり、時間的経過に伴って階層間格差が固定化あるいは拡大する可能性を指摘している。外国籍保有者が低所得階層に定着してしまうことを防ぐための方策の一つとして、子ども達への保育・教育の保障があげられる。日本で暮らす外国にルーツをもつ子どもの数も増加の一途をたどっており、先の総務省の統計では、日本に在留している0歳から5歳の外国籍の子どもの数は2012年には108284人、2019年には138986人と1.28倍となっている。3歳から5歳に限定すると40322人から74457人と1.85倍となっており、言語を中心とした文化的な背景が生活に大きく影響を与えると考えられる年代が急増していることがわかる。また、日本国籍をもつ外国人の子ども以外にも日本国籍でありながら外国の文化で育てられている子どもも多く、その数を入れるとさらに多くの子どもたちが複数の文化の中で生活をしていると言える。

2. 外国にルーツのある子どもと保育の場

日本国内の幼稚園、保育園等の就学前施設にも1990年代から、特に工業を中心とした地方都市などに外国にルーツをもつ多くの子どもが入園している。当初、外国にルーツのある子どもへの支援の多くは学齢期以降を中心として進められ、就学前の子どもの施設に関してはほとんど支援がなく各園が手探りのなか努力を重ねてきた経緯がある。

林（2001, 2015）は2000年と2012年に群馬県内の集中地域の保育園でおこなった外国ルーツの子どもの保育についての調査では、行政の支援がなかったために手探りで保育方法を探してきた様子が報告した。文化が異なる子どもたちを受け入れてきた多くの保育所等では、「言葉が通じない」「給食が食べられない」「集中力が続かない」「保護者とコミュニケーションが取れない」などの子どもとその保護者の課題を取りあげ、今までの経験から様々な方法で保育を進めてきたが、従来の日本の文化で育ててきた子どもを中心とした保育の方法では対応しきれない課題があるとしている。そこには今まで保育者が続けてきた保育の方法に沿って、子どもや保育者が戸惑う場面のない保育を目指してきた側面がある。多くの保育園では問題があった

としても従来の保育方式を変えることなく、その園の方式に沿って保育できることが問題解決だと考えていた。

この状況は外国ルーツの子どもを日本人化させる保育であり（小内2003）、学齢期以降の言語コミュニケーションや学習状況、アイデンティティに大きな課題を残すことも分かっている。また、日本式の保育に馴染むことについて、保育者は「子どもは慣れるのが早い」と感じているが、実際にはその解決には長い時間がかかることが分かってきた。「令和元年11月26日幼児教育の実践の質向上に関する検討会 第7回く資料2 > 幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方に関する調査研究—外国籍等の幼児が在籍する幼稚園の教育上の課題と成果から—成果報告書（質問紙調査の結果）外国人幼児の受入れにおける現状と課題について」によると、入園当初の外国人の子どもの気になる姿（よく見られた）の割合について「教職員からの指示がわからない」（59.6%）が一番多く、「絵本に興味をもたない、楽しめない」（29.1%）、「列に並んだり順番を待たない」（28.5%）と続く。これらの課題は時間が経つにつれて徐々に見られなくなり、入園から半年ほどで安定してくるとみられるが、「指示が通らない」に関して言えば、半年を過ぎても約半数が解決していない現状があり、時間の経過だけでは問題を解決できない現状がある。

3. 越前市の多文化化の背景

福井県越前市は福井県嶺北地方中南部に位置し、平成17年に旧武生市と旧今市町が合併してできた230.70km²人口80,667人（2021年9月1日現在）の三方を山で囲まれた内陸の都市であり、電子機械化学メーカーを中心とした工業地域でもある。このような環境が外国人の雇用を生み出し、2018年の市全体の外国人の割合は5%、雇用している企業のある西地区では15.6%となっている。

年々、外国人の定住傾向は高まり、生活者・地域住民として認識する視点が必要になってきたことから、市は越前市多文化共生推進プランを策定し、多文化共生を取り巻く課題や基本的な考え方を整理するとともに、外国人市民、日本人市民が同じ市民として多様な価値観を認め合い、お互いの理解と尊重のもとに市民、市民

団体、企業など各種団体と行政が協働して多文化共生のまちづくりを計画的かつ総合的に展開しようとしている。

4. 越前市の保育 2019年の訪問を基に

越前市は保育者採用試験において全国で初めて「ポルトガル語コミュニケーション能力試験」を2018年度に導入した。その背景を知ろうと、筆者ら（林・若林他）は2019年2月に越前市を訪問した。市役所の複数の担当職員による説明があり、越前市は20年前には公務員の国籍条項が撤廃されており、ブラジル人女性がすでに公務員として働いていた。また、次年度職員の募集要項には性別の欄も設けないとのことであった。外国人集住地域の保育園では、園児の半分近くが日系ブラジル人を中心とした外国人で、ポルトガル語が母語の常勤職員が2名働いている。また、翻訳を担当する市の職員が週に2回、手紙やドキュメンテーションをポルトガル語にして、日本語版と一緒に掲示するなどしていた（図1）。



図1. A園でのドキュメンテーション
上がポルトガル語、下は日本語版

この園の園長に対し、インタビューおこなった際に「外国人の児童が増えたことによって、今までの保育がうまく運ばなくなり、試行錯誤

をした。その中で一度今までの保育の概念を取り払ったところから考え始めた」との言葉があった。筆者らが今までインタビューをおこなってきた他地域の園や園長らの言葉などとは醸し出される雰囲気異なり、保育士が人権や平等を主張するのではなく、子どもたち一人一人が不安になることがないように、伸び伸びと育つ、いい保育をしたいという想いが伝わってきた。

現在、ダイバーシティ&インクルーシブの流れは世界で目指すべき方向として設定され、様々な場所で工夫を凝らした取り組みがなされている。特に保育の場は外国人の子どもや障害のある子ども、家庭的な背景に課題のある子どもなど様々な子どもが同じ場を共有することから、世の中の他の場に先駆けてインクルーシブな場を作り出すことが必要とされ、実践されてきた。

しかし、実際には保育の場でも、保育者らもつ今までの保育に対する考え方と現状を擦り合わせて先に進むことや、その具体的な方法がわからずに、困難を感じている場面が多くある。そのような現状を考えると、越前市の保育者たちが経験してきたことを丁寧に描き出すことで、インクルーシブな場をどのように保育現場に作っていくのかを考える助けとなるだろう。

2019年の越前市訪問では、外国にルーツのある子どもが増えたことにより、子ども理解と子どもの発達の捉え直しを迫られたという状況が語られていた。本報告では、その園長の言葉に着目し、今までの具体的取り組みと保育に対する意識の変容を描き出すことを目的とし、インタビュー調査を行った。

II. 方法

1. 研究協力者

越前市内の保育園3園の園長・担任保育者合計6名

2. 調査時期と方法

2021年1月、Zoomを使用して、グループインタビューを行った。当日の総合司会は、越前市の行政（子ども課）と関りがあり、インタビューのコーディネーターでもある第三著者が担当した。保育者への主たる質問は第二著者が行い、第一著者は質問内容を補強し、深めていく役割を担った。当日は全体で約60分のインタ

ビューとなった。

3. 調査内容

質問事項は事前に研究協力者へ周知し、インタビュー当日を迎えた。質問事項に関して、一人の研究協力者（園長）に回答してもらいながら、その内容をきっかけに、その他の協力者にも発言を求めた。また、インタビューの回答内容に応じ、意味の確認や具体的かつ詳細に教えて欲しい事柄について、インタビュアーが補足的に質問を行った。事前に周知していた質問事項は次の通りである。

- (1) 外国ルーツの子どもが多く入園する前（困難状況に陥る前）は、どのような保育方針のもとに、どのような保育を行ってききましたか。
- (2) 外国ルーツの子どもが多く入園し、具体的にどのようなことで困難を感じましたか。
- (3) 困難状況のなかで、園の保育がこのままでは難しく、変えなければならぬと思ったきっかけになることがあったら教えてください。
- (4) 具体的に何を变えていこうとしましたか？そこでの難しさや変えていくのに何が助けとなりましたか。
- (5) (1)～(4)と被ってかまいません。ご自身の保育への考え方がどのように変わっていききましたか？

4. 分析方法

Zoomで録音したインタビュー内容を逐語録化した。逐語録を精読した後、①どのような困難に直面し、当時何を思っていたのか、②困難と向き合う中で、保育者の認識や常識（保育観）、保育のあり方がどのように変わってきたのか、③現在、課題になっていることを具体的な出来事とともに整理した。

5. 倫理的配慮

- (1) 事前に書面にて調査目的と内容を記した文書を、コーディネーターを介して、研究協力者に調査依頼を行った。その際に、守秘義務とデータの取り扱いに関する内容を併記した。その後、インタビュー当日、実際のインタビューを行う前に、第1著者が、再度、調査目的と内容、守秘義務とデータの取り扱いについてインフォームドコンセントを行い、調査協力の承諾を得た。
- (2) 帝京短期大学倫理審査委員会の審査を受け

た。

Ⅲ. 結果

ここでは、インタビューに協力してくれた3園のうち、2015年に園全体の園児数4割が外国ルーツの子どもとなった園（以下、Q保育園と記す）に注目し紹介する。その年の2・3歳児クラスは、半分程度が外国ルーツの子どもが在籍することになり、それ以前とはクラスの状況ががらりと変わったという。当時、3歳児クラスを担当していたA先生（保育歴約20年・現在異動して別園で主任）、元園長のB先生、その後、Q保育園に配属になったC先生（保育歴5年）の語りを分析対象とした。

以下、インタビューの中での3名の発言を整理して、外国ルーツの子どもが半分程度になったとき、どのような困難を抱えたのか（1.の項）、そのなかでどのように保育者の認識が変わってきたのか（2. 3.の項）、現在、課題になっていること（4.の項）に分けて、その内容を紹介する。

1. 困難の始まり：従来の保育では通用しない

「言葉の壁と文化の違いがあって、自分の保育でなんとかしようと思っていた自分の気持ちがあり、その中で保育をしようと思うので、子どもたちも訳がわからなくて『何言ってるんだ、この人』みたいな感じで保育室を走り回っているブラジルのお子さんがいるという状況でした。(A先生)」

A先生は、ベテラン枠に入る保育者で、Q保育園に異動した初年度、3歳児クラスを任された。これまでの経験から3歳児クラスの遊びや活動を想定し、保育を進めようとしていたが、半分が外国ルーツの（主にブラジル）子どもを前に、自分がこれまで行ってきた保育では通用しないという状況に直面した。

とにかく自分の働きかけがブラジルの子どもに入っていない、騒然とした日々が続いていた。4月から6月までの3か月間、A先生は、園の中にあるベランダに出て、張り裂けそうな気持ちを発散し、保育室に戻ることもしばしばあった。同僚とも相談しながらどうしたらクラスがまとまるのかを考えていたが、子どもが担任である自分に気持ちを向けてこないことが一番つ

らなかったという。そこで、その背景に自分と子どもとのコミュニケーションに問題があるのではないかと考えた。自分は子どもたちのことが分からない一方で、子どもたちも自分の言っていることが分からない。故に、子どもが自分とかわりを持とうという気になれないのではないかと仮説を立て、まずはとにかく一緒に遊ぶことから、子どもたちの興味関心を探ることから始めていくことにした。その様子を次のように語っている。

「スキンシップを取ったり、一緒に走ってみたり、一緒に虫を探したり。とにかく一緒に遊ぶことを心掛けて過ごしていました。ブラジルのお子さんも『この人は自分のことをわかってくれるな』とちょっとだけ心の通いみたいなものが見えてきて、1年間そうやって子どもたちと過ごしてきました。(A先生)」

ここで分かるのは、保育者も外国ルーツの子どもたちも互いに関心を寄せあい、関係を作ろうとするその基盤には、相手の言っていることが理解できること以上に、「自分のことを分かってくれそうだ」という期待が、子どもの中に生まれてくるのが重要だということである。その期待が、この保育者ともっと関わりたいという欲求を生み出すのだろう。遊びはその鍵となり、A先生がその先に、一人ひとりの子どもがより安心し、楽しく過ごしていくためにはどうすればいいのかを考えることへとつながったのだと考えられた。

とはいえ、従来行っていた保育を棚に上げ、とにかく遊んでみようというなかで、本当にこれで良いのだろうかという不安や心配はつきものであった。そのため、同僚たちと以前にも増してコミュニケーションを取り、支え合いながら、試行錯誤の日々を過ごしていたということだった。

2. 自身の保育観を問い直す：文化の違いがもたらすもの

自分が想定した保育（計画）を脇に置き、“一緒に遊ぶことから始める”と決心し、それを進めていくうちに、A先生やB先生（元園長）は文化の違いから、改めて自身のこれまで培ってきた経験や保育観を問い直していくこととなる。ここではまずその内容を紹介し、さらに、現在、担任として働くC先生が感じている文化の違い

も取り上げる。

(1) 保護者に家庭の様子を尋ねるときに持つイメージへの気づき

従来（外国ルーツの子どもが半数を超えない前）、園では家庭における子どもの状況を聞き、なるべくその情報をもとに、家庭的な雰囲気を作り、子どもが安心して、過ごせるようにと配慮していた。A先生が初めてこのクラスを担当するときも、いわゆる家庭での様子を聞き取り、保育環境を工夫していこうと考えていたが、日本とブラジルの家庭の違いまで想定していなかった。

「家庭というイメージが日本の家庭というイメージだったので、受け入れ方も日本の受け入れ方というかたちで、ブラジルの文化がまったく頭になかった… (A先生)」

日本の家庭では、園から帰宅した後、夕飯やお風呂、遊び、寝る時間と子どもとかわることが多い。その分、保護者は、家のなかで子どもがどのように過ごしているのかを他者に伝えることができる。そうした家庭での生活を、保育者は送迎時に保護者とやりとりする、あるいは、連絡帳を介して、その家庭の雰囲気を掴んでいく。こうした保護者との情報交換も日本ならではの「受け入れ方」であり、それが外国ルーツの保護者の状況にあっているとは限らないということに気づいた。なぜなら、Q保育園に在籍する外国ルーツの子どもの保護者の多くは、夜、夫婦交代で働いているか、他の誰かに子どもを預けており、これまでのように家庭での様子を聞くことに、A先生が戸惑いを覚えたからである。さらに外国籍の子どもの登園時間が定まらないために、A先生が保護者とやりとりする機会を見つけれなかったということも背景にあった。

保護者とのやりとりは、主に通訳の方を交えるとともに、連絡帳も担任保育者が日本語で書いたものの下にポルトガル語で書くなどの工夫も行いつつ、保育者の思い、子どもの様子、事務的な連絡事項を伝えることだけを心がけたという。だが、それも一筋縄ではいかなかった。

(2) 時間感覚を受けとめる～不定の登園時間

①にある外国ルーツの親子の受け入れという点に注目すれば、登園時間を巡り、これまでの考え方を大きく変える必要があったと元園長の

B先生は語っていた。登園時間が家庭によって異なっており、例えば、9時あたりに子どもたちが登園し、ひと遊びしてから、クラスの活動に移るといった流れを作れないことを意味する。子ども同士の関係づくりや集団づくりを考えたとき、従来の1日の流れを崩していくことには、園内の保育者の抵抗もあった。それでも、そのバラバラの時間に登園することを受けとめることから始めたという。

「例えばブラジルのお子さんだと、10時登園、12時登園、午後2時登園は結構当たり前なんです。でも、そこらへんを自分の中で『9時まで登園ってお願いしているのに、なんで来れないの?』『なんでこれができないの?』って思ってしまうと、やはり保育もうまくいかないので、目の前にいる子どもたち、お母さん、家庭環境をまず受け止める。なかなか受け入れることはできませんけれども、取りあえず受け止める。じゃあ、どういうふうにしていったらいいかなっていうことを自分の中で内面を変えていかないと、やはり保育はうまくいかないんです。(元園長B先生)」

“受け入れることはできませんけれども”という発言には、頭で分かっている、でも本当にそれでいいのだろうか...という抵抗感があることを暗に示していると思われる。ただ、「なぜ来れないのか」と相手に責任を押し付けてしまうと、バラバラな登園時間という変わらない状況に、保育者も保護者も「どうして分かってもらえないのだろう」と互いの分かり合えなさに苦しみ続けることになる。それは、その子どもと保護者が安心して園に登園し、楽しく、明日も来たい場から遠ざかってしまうことを意味する。そうならないためにも、これまでの保育の方法を脇において、子どもと保護者の立場に立った保育を考えることをしてきたとのことだった。“自分の内面を変えていかないと”というのは、自身の保育観に基づいた保育方法から脱却し、新たなものを作り上げていくことを志向することであり、そのように変わっていくことを保育者自身が奨励できるようになるということなのだと思われる。

(3) 食文化について～食事におけるマナーの違い

保護者から家庭での様子がかめないうちで、A

先生は、食事場面で、日本とブラジルとの文化の違いに直面した。3歳児クラスとなると、生活習慣面での自立が大きく取り上げられるが、食事をするとき、箸を使い方やお皿の持ち方などを子どもに指導することがある。しかし、それは、日本(アジア)の文化に限ったことであり、ブラジルではそうではない。A先生はその時に自分たちの食文化との違いとそれをどのように考えたのかについて、次のように語っていた。

「私たちは、お茶碗を持って食べましょうとしていたんですけども、外国の補助の先生にいろいろ相談したところ、ブラジルではワンプレートのお皿で、お皿を持つことは行儀が悪いといわれているということも教えてもらったことで、そこまで日本のマナーを押し付けてはだめだなと、躰というかたちで伝えてはだめだなと思った。(A先生)

食事ひとつをとっても、その方法は異なっている。あまり意識せず、「お茶碗を持って」とお皿を持つことを促したりするが、それはブラジルの子どもにとっては、ふさわしくないことでもある。A先生にとって、常識的であったことが、外国の子どもにとってはそうではないということを知り、食事場面で何を子どもに経験として提供するのかを考える機会となっていく。このときは、“楽しく食事を食べること”をねらいとしたとのことだった。

このように、外国の文化に出会うことは、A先生に次のような影響を及ぼしていると考えられる。ひとつは、自身が当たり前のことだと思っていて、かかわりや声かけのなかに、自身が培ってきた価値観や文化的な背景が含みこまれていることに気づくことである。次に、その気づきから価値観や文化の違いと向き合うことで、どちらか一方に合わせることを考えるのではなく、“食事とは一体何なのか”ということ問い直すことにつながっていた。

(4) 文化による遊びのズレをどのように捉えるか

現在、Q保育園で4歳児クラスを担当するC先生は、A先生や元園長のB先生が経験した困難な状況を経た後に、異動してきた。その時は既に従来の保育を見直し、意識を変えて保育を展開していたが、いざ担任をすると文化の違い

による遊びのズレを肌で感じるようになったという。

「イメージのズレというか文化の背景が違うところから遊びも変わってくる。4～5歳になってくると、一緒に遊ぶ楽しさから遊びを友達同士で進めていくことを大切にしたいなと思っているものの、言語だけじゃなくて文化とかの背景から子ども同士のズレも感じている段階です。(C先生)」

例えば、行事に向けて取り入れる遊びでも、ハロウィンやクリスマスなど日本でもよく知られているものは、子ども同士でイメージを共有し、楽しむことができたという。一方で、節分で鬼の面を作っていると、その年に入園してきた外国籍の子どもにはよく分からないようだった。日本人にとっては、絵本や豆まき、近年ブームになった「鬼滅の刃」というように、“鬼”という存在は身近なものであろう。しかしながら、外国の子どもにとって、日本風の“鬼”は生活の中に根付いていないようだった。このように伝統行事にまつわる遊びをひとつとっても、その文化によって違いがある。C先生は、日本人の子どもも外国ルーツの子どもも、互いの文化の違いを知っていくためにも、伝統行事は大切にしていきたい気持ちを語っていた。しかし、それはみんなで同じことをすることとは意味が異なっている。なぜなら、C先生は力強く次のように語っていたからである。

『一緒にしなければいけないわけじゃないんだな』と気付いてきました。(中略)一緒に遊びたい思いがあれば自然と子どもたちはわかり合っていくし、保育者が『共有しなくちゃ』と思わなくても、遊びの中で子ども同士が寄り添っていく雰囲気づくりが大事なんだなと感じています。(C先生)」

IV. 総合考察

1. 保育の行き詰まりから当然視していたものを問い直す

外国ルーツの子どもがクラスの半分程度になり、従来の保育では外国ルーツの子どもに通用しないという状況に直面し、とにかく遊ぶということを中心に据えた。このことは、保育者にとって相当のシフトチェンジだったと思われる。だが、一人ひとりの子どもがとにかく楽しく安

心して園で過ごせるようになることを中心に据えていったことで、逆に外国ルーツの子どもや保護者が持つ文化との違いを気づいていくことにもつながっている。

例えば、食事場面ひとつをとってみても、日本では器を持って食べることが良しとされる一方で、ブラジルではそれはマナー違反であるという、全く逆の方向での礼儀作法が存在する。登園時間に関しても、多くの日本人の場合、決められた時間に園に来るものだということが暗黙の裡に了承されており、そこに何も疑問は持たない。対して、生活時間の違いという背景も重なって、外国ルーツの親子は自分たちの時間で園に通ってきており、そこに遠慮はなさそうである。インタビューで出てきた例はほんの一部であろうが、相反する生活様式に出会うことは、保育者たちの当然視してきたものを浮き彫りにするきっかけになっている。

とはいえ、自分たちが当たり前だと思っていることを意識することは簡単なことではない。Q 保育園の場合は、保育が立ち行かなくなるという状況に直面したという状況も大きいですが、その根底に、保育者同士の対話と個々人の内省(内的対話)を積み重ねていくことが支えとなっていると考えられた。インタビュー中、他の保育者とのコミュニケーションが増え、ちょっとしたことですぐに相談していたことや自分のなかで相手の立場にたったときにどう感じるのかを繰り返し自問自答していたことが、何度も語られていた。このような他者と自分との対話を通して、今まで経験のないことや外国ルーツの子どもを徹底的に理解しようとすることで、自分たちにとって当たり前だと思っていたことが相手にとっては異なるという差異への認識の扉を開いていく。そのことは同時に、自分たちが今まで何を大切にしてきたのかという考えや価値観を再考していくことにつながっていくのだと考えられた。

2. 他者の視点を取り入れ、自分たちが変わり続ける

“自分たちが当然視してきたことが相手にとって異なる”ことに気づくことは、おのずとその後の保育をどのように展開していけばいいのかという問題とも向き合うことになる。Q 保育園の保育者は、どちらかの意見や考えに合わせる

のではなく、子どもや保護者一人ひとりにとって、園が安心して楽しく生活できる場となるためにはどうすればいいのかという保育の本質的な部分から考え直すようにしていた。

先に出ていた登園時間を例に取って考えてみよう。今までは9時あたりまでに登園してきてもらい、全員が集まってから、クラスの活動や遊びを始めていたとする。だが、その登園時間がバラバラでなかなか活動や遊びを始めることができない。もし、この方法を続けていくのならば、登園時間がどうして決まっているのかを説明し、相手に納得してもらい、登園してもらいしかなくなってしまう。これでは、相手の生活状況や時間感覚を考慮に入れず、こちらの考えを押し付けているだけになってしまう。また、相手の登園時間は問わない（許容する）けれども、従来の保育計画は変えないということになれば、9時に登園する子どもだけに遊びと活動を保障し、そこに間に合わない子どもにはそこにいることだけを認めていくこととなる。これら二つは、保育への参加（浜谷，2018）という視点に立てば、排除となろう。Q 保育園の場合、このふたつを選ばなかった。バラバラな登園時間であっても、それぞれの子どもと保護者が安心して楽しく過ごせるような場となるよう、自分たちの保育を変えていった。従って、子ども一人ひとりが保育に参加できるような状態をどうしたら作ることができるのかを考える道を選んだと言える。

多様性を尊重しようとするとき、相反する考えや一見合意がとれなさそうな意見の違いにしばしば出会うことがある。登園時間は良い例であろう。インタビューにも「受け入れることはできないけれど」という文言があったように、保育者の間には様々な立場での考えがあったはずである。それぞれの正当性や合理的な根拠を並べ立てても、何をどう選べばいいのかわからない状況になったとき、大抵はどこかで折り合いをつけて、自分の考えや立場を譲ることが現実的とされるのかもしれない。しかしながら、誰かが自分の意見を譲り、我慢をすることは、その人の了解や納得があったとしても、互いを尊重したと言えるのだろうか。この問題は、多様性の尊重やインクルージョンを実現しようとするときに常に突きつけられよう。Q 保育園の事例は、この問題を考えるときのひとつの糸口

を提供してくれる。つまり、不定の登園時間への是非を問うのではなく、今まで自分たちが大切にしてきたことを見つめ直し、子どもや保護者が安心して生活できる場とは何かという園そのものの役割に立ち返り、保育者同士で対話し続けることで、自分たちが変わっていくことになった。そのことが、保育者たちにどのような影響を及ぼしたのかまでは今回のインタビューだけでは明らかにできなかった。今後の課題としたい。

3. 多様性に常に開かれているということ～インクルーシブ保育の入り口

インクルーシブ保育とは、誰もが排除されず、一人ひとりの違いや意見が尊重される保育である。そのためには、一人ひとりの持ち味が活かされ、互いに認め合い、自分たちの生活を創造していきける場をいかに作っていくかが鍵となる。

そうは言っても、それを実現していくことは簡単なことではない。本報告のインタビューにもあるように、生活習慣や時間感覚などは、その国の文化や家族の労働状況によって異なっていた。自分たちが当たり前だと思っていたことが、実は相手にとっては違うという意識を持たないと、例えば「お皿を持って食べる」ことを知らず知らずのうちに押し付けてしまう可能性がある。さらに、そのことに気づかず、「お皿を持って食べる」ことが良しとされる状況が継続されるならば、「それ私の国ではあり得ないことなんだけど」という声を圧殺してしまうかもしれない。

障がいや発達障がい、外国にルーツがある子どもへの保育において、「多様性の尊重」の反対にあたる「同化」は、単に一緒に同じことをするという形式的なことだけを意味しない。大勢の大人や子どもが持っているであろう常識を疑わず、その常識と異なる見解を持つ他者が声を挙げられない状況を作り出しているところに、「同化」の根深い問題がある。そのように考えれば、一人ひとりの違いや意見を尊重するためには、自分とは異なる他者を常に想定し、相手のことを知る姿勢が求められる。言い換えれば、どのような意見も聞く・聞かれる状況と安心して意見を言える状況が日常的にあることが、インクルーシブ保育への入り口となる。つまり、多様性に常に開かれていることが肝要となる。

その上で、保育者が同僚とともに自分たちの保育を問い直し、変わり続けていくことで、インクルーシブな保育を可能にするのだと思われる。

*本報告は平成30年度科学研究費基盤研究C課題番号19K02956（研究代表者 芦澤清音）の一部である。

【謝辞】

本研究にご協力下さいました越前市市民福祉部子ども福祉科の皆様に深く心より感謝申し上げます。

【文献】

是川夕（2012）「日本における外国人の定住化についての社会階層論による分析：職業達成と世代間移動に焦点をあてて」内閣府経済社会総合研究所

林恵（2001）「群馬県大泉町における外国人の就学前保育の現状について：群馬県太田・大泉の小中学校国際化の実態と求められる教員資質の総合的研究」『平成11年～13年科学研究費補助金研究成果報告書』日本学術振興会 pp.81-94.

林恵（2015）「大泉町の外国人児童の保育の現状と課題」大泉保育福祉専門学校研究紀要第11号，28-36

小内透（編著）（2003）『在日ブラジル人の教育と保育：群馬県太田・大泉地区を事例として』明石書店

浜谷直人（2018）「第7章インクルーシブ保育時代までの歴史とインクルーシブ保育の実践上の課題」『多様性がいきるインクルーシブ保育—対話と活動が生み出す豊かな実践に学ぶ』浜谷直人・芦澤清音・五十嵐元子・三山岳著 ミネルヴァ書房

Childcare in a Foreign Neighborhood in Echizen City, Fukui Prefecture

—Considering inclusive childcare from the perspective of changing the awareness of childcare workers—

Megumi HAYASHI¹⁾ • Motoko IGARASHI¹⁾ • Hideki WAKABAYASHI²⁾

1) Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College 2) Utsunomiya University

【abstract】

【Purpose】 Japan is becoming more multicultural, and many children with foreign roots are enrolled in nursery schools. In the industrial area of Echizen City, Fukui Prefecture, the percentage of foreigners is over 15%. We visited Echizen City in 2019 and spoke with the directors of the nursery schools. At that time, they said, "As the number of foreign children increased, the conventional childcare system did not work well, and we went through trial and error. In the process, we got rid of the conventional concept of childcare. By learning more about this story and the changes in the awareness of the caregivers due to the inclusion of children with foreign roots, we thought it would be helpful to create a place for inclusive childcare.

【Method】 A group interview was conducted using Zoom for about 60 minutes. The content of the questions was made known to the research collaborators in advance, and they responded about the difficulties they felt when the children with foreign roots entered the nursery school, the reason why they decided to change the childcare, and specific methods.

【Results】 The results of the interviews are as follows. There were situations where the conventional methods of childcare did not work, so we started with just playing. However, as she struggled with the question of whether this was the right way to go, she noticed the differences in the cultural backgrounds of the children and realized that the values she had cultivated included cultural backgrounds in the way she interacted with them and talked to them. By confronting these differences in values and culture, she was able to rethink the meaning of childcare situations themselves, rather than trying to accommodate one or the other.

【Discussion】 The situations that support inclusive childcare were presented as follows. (1) When conventional childcare does not work, it is possible to recognize common sense and differences through dialogue with others and oneself, and to reassess values. (2) Rather than trying to reconcile differences in values and opinions, we can review the nature of the roles of those in question. (3) A situation exists on a daily basis where all opinions can be spoken and listened to with ease, and childcare workers can continue to question and change their own childcare together with their peers.

【Key words】 Multiculturalism, inclusive childcare, changing the mindset of childcare workers.